



まくのの竹三
全

中村俊定文庫
文庫 18
544



本言題箋も表紙も無し。

嶺塚記 (〇七)

岩部

香取郡栗源町(マクヒト)岩部
(役場)也。佐原町より多古町に通ずる途
中十料

寿仙

(△十三丁) 村長

明和三年宗瑞の先午後午に、鬼什の家文

三編五色墨の楡 (△十八丁) 梅人野逸、柳川、楚名、柏翁



義蘭欲茂
殊風破之



池亭榮書





明庵隱士筆



老懷辭

俳三昧述



梅り待まり一雪のいぎに和く九夏は寂ふ以こひ
 鐘情一毎の山もまなふまを待てうそを流平枯ら
 時をうそ一凡小友なる編草の古び駈るよにたる懸
 藤は危うしや源五々忠市儂の九十九髪沖し
 流しし信濃へ嫁入を好るしかこよ嫉妬の山あね
 を解きし一ふれ未ぞいぶし元三小佛目かき土
 朽ち根天王寺小し貴きまな常り賤がぬを屋の朝

衣令_レ走_レし、**廿一月**に持て下_レ寧の炳戒よ_レ非_レを降
も、**廿二日**には寺屋あきつるを、**廿三日**早霧は
まよけきり、**廿四日**は心は物のつらう物事たご_レ多
る時、**廿五日**は_レ僧を倡_レ有_レ甚_レ苦のたご_レは_レ何_レ
廿六日は_レ僧あ_レげ不肖_レを思_レ門下自_レ然_レたきご_レう_レせ_レ
杖_レと_レし_レ志_レ改_レ属_レ、**廿七日**は_レ安_レ否_レと_レ祈_レつ_レす
廿八日は_レ凡_レ三十_レ餘_レ年_レま_レる_レも_レみ_レい_レ謙_レ、**廿九日**は_レ假_レ也_レ
門を_レあ_レり_レひ_レど_レ只_レ中_レ、**初日**は_レ稱_レと_レ是_レ道_レ守_レ
解_レ小_レ法_レの_レき_レか_レは_レ必_レ改_レ垂_レ目_レつ_レる_レ南_レ水_レ流_レの_レち_レり_レ委

る_レつ_レ、**二日**は_レ漣_レ信_レお_レ別_レ又_レ瑞_レと_レあ_レり、**三日**は_レ赤_レ粉_レを
甲_レ非_レ又_レ、**四日**の_レ申_レ度_レは_レ衣_レ改_レ列_レを_レみ_レし_レあ_レり_レ松_レ三_レ城_レ海_レ乃
海_レ乃_レ不_レ踵_レと_レ破_レり_レ、**五日**は_レ只_レ生_レ涯_レを_レつ_レる_レ、**六日**は_レ旅_レと_レ栖_レの_レひ_レき_レ不
海_レ乃_レの_レふ_レ止_レ時_レあ_レり、**七日**は_レ成_レの_レあ_レり_レ、**八日**は_レ延_レ山_レ名
貫_レを_レつ_レり_レ、**九日**は_レ蘇_レ洛_レ浪_レ華_レ中_レ園_レ西_レ玉_レ私_レ海_レ代_レ説_レの_レ記_レを_レ平
あ_レり_レ、**十日**は_レ高_レ宗_レ門_レの_レ徒_レと_レま_レる_レ、**十一日**は_レ世_レ命_レと_レあ_レる
危_レの_レあ_レり_レ、**十二日**は_レ山_レを_レつ_レり_レ、**十三日**は_レ眼_レを_レん_レ、**十四日**は_レ杖_レと_レ引_レん
い_レる_レ命_レは_レ一_レ德_レ何_レもの_レも_レ是_レよ_レあ_レり_レ、**十五日**は_レ怪_レひ_レ、**十六日**は_レ真
夏_レの_レ比_レふ_レ、**十七日**は_レ夜_レに_レ盜_レ汗_レの_レあ_レり_レ、**十八日**は_レ汗_レを_レ流_レる_レ、**十九日**は_レ舌_レ値_レの_レ萌_レ

ありは親しき限り門家の事と見えたりはれを心
 通や七十ある老きならむ雲より流るる浪枯れん日
 いふ似る事ありしをわづれし只幼より佛門に入て粟粒
 と費す事ありしをわづれしやけく倒き脚を野
 さすも事ありしをわづれし祖國の別れの一分ありん
 たる故にいまけざる母見との遷化は事止まら
 難し安堵のなりひありあるやわづれし松家
 法華寺の招提はありし自然の敷定りて流るる
 流るる事ありしをわづれし千里をさすをわづれし

初親や安井 誠心ありし旅のりし早且此の心
 通しき事許諾しわづれし是をわづれし緒のむか
 きも一はある惜むしけりありしをわづれし此を逢の智
 と利根ありし神法ある研石亭に止免斗流以下此
 門家ありしある夜の候に流す免まらるる東都千法谷
 小法是と定する年月のそめ東奥ありし事ありし
 その中間舌痕いふみと指し彌一壺二壺ありし一日の
 喉と淫しき事ありし松ありし事ありし導法説法は心
 意感する所なり水月月の末えりし小彼地とありし事ありし

往後山海の銀罪湯の際く号をうけ夜に沈むを
 あすふ涙しききあえ如半なり割下野のち原
 ある温泉に浴一依の心務平さつるよそ是れり
 印すすの絶念屋月中の七日を武は念多の二十
 日小あゝぬら湯の家こ一山先抄ひそきてにんせし
 際とすう原らこまあまおひ御千莫逆の友法不
 一蓮の契事同ひまつどい旅館下を記ととなりや
 ちけ北のぬかきよあまあろも那くまひく月日
 新少るよとよびも抱うてへく是未於きり麻衣

山の鑑目よりかゝてはく記をきく一廿七日の午時
 ころまやこゝろ夜ひよひも麻衣事はりし
 免この日星成祀一一江府に赴け廿五日に海白
 二橋原道絶へ海のまゝ昏や一海一鞠可ある痛
 麻衣あり抱ちく葛原集れあふ海流の古ぬきり
 一初ましこ破千まひはは海に事かあそ只頻の原
 涙物を押拭ひ一一一四あふあしん心のこも
 初めども熱をんまふと傳一一流るを伽のま
 一水是すきこゝろ志こゝろ龍ひ初まふこゝろ

あゝ君や君の御影もあゝやはさうな唐草歩
徑——後——やとねと聖朝のやうういふ心
——みけ——さうさうと墨紙のさうふ

葉のまゆもはるはの山吹哉 史

まよふもさゆも今屏の月 既醉

扇あえぬ祢子の服つ——ほつ——とあはの寄他あり
今時——さうさう始終の事あり教つ——後さうい
け師のさうさう易方責ちるさうさう——昔——さ
い年移4——あゝさうさう今又さうさう——羽之四ら

事なうさうさう終の記と宗祇のさうさう死の大事
成あゝ抱つ——さうさうさうさうさうさうさうさう
あゝのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ひささうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
我家の二諦不二念三千のさうさうさうさうさうさう
ていさうさうのさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ははさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

たさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

八つと善しき道は首領志のふ眠するを歌ふ
 焔浮の二化永く事く入るる骸を麻衣山は茶毗
 すく十一日暮る白橋姫を杵試みげ穢穢る水女は校と
 止免幸由の門原信者の道俗恩顧の軍中侍
 群系を集棺とかこみ一煙をく帰るるありて
 情心窮るを終る四辰舍利を祀るを去さぬは止
 前断る尖り後連る尾上あくる處る老法師
 うるあすの人まゝく厭ふくは公檀の博識
 三仗の煩ひあくる護るは鳩の空くを孫木家と来
 魚の音ふらりすまやけ農明人絶てぬるのまお
 晶世界ふ似るけ閑松平遺骨とく免る富貴は
 月よき一向つらく地免あくる上人ありて
 すく世の中意月波ある事正解年ありて
 みく器けく老師徳りの志くを波波のす
 とくえくあはけ記と述く見閑陸表の君子首
 題一遍の回向よる霊池中の蓮とあくる事一
 仰の

降中川日し水くや五音神道

既醉拜

研塚記

くろく峰く吾妻は青森より二里とく好む西平冠嶽より
村ありてひいふ山あり林は山より言ふ十丈より山の上の
南より師の庵あり研塚より山を越え川あり朝来^{朝来}
川より其水も北より流るる油田の胡たら谷あり
清きより滴りて其言ふ所のまきれ常々新ぬまき
持よ大石のふかーあまきま下へ水もさるる
小き言へる雪も凍らるる町のまきれ温まらる大石
が目^目にまきらる九十九里屋あり辰の海あり也今も

おし 渡州清の住里は信のふ志門上人の川に流る

在哉やましくきりきてつる麻衣の

新身の掃きあやしくも明し

とあし神のしあじまう麻衣山はわく師の扉と扣
て安平志ぢうの流のそまは其表脱控く師の掃え
よあなし一明るよ月よやうきまよと掃りし一これ
此の共言を印しく物掃平ふがう日掃もいし一まの
日敷とてそと送るまはし一うらと白ひのまはあしぬち
よ我もたれへ掃きあへるまは流す杖ましくまはや命も

ふう一又もんまも岩くぬし一せんく掃りてそま
出ぬし神のしあがし掃りしけ此のそ川に其まあふ
さ流流あし流し一ああし一教書し

まのやりしあし掃掃那の流説法 茂蘭

阿難 如葉 あくあんとくせふ雪解れ川 不門

かくち武宗澄の古流もも自にまらう水魚のまらまら
あはれし一あまて流もあまらうん送るましくを師に
滑粉方と掃りしやうまらうし一川原の流うまらうし
雪とてしりまらうまらうまらうのまらうし

研年ノ始ニ由リ

十一篇之麻衣山の宮莫くも秋涼小感慨と起し
立く一海竹とて言ふ事其の徳とてやまといふ
野毒の毒つて或帯く有頂は趣きし一師一法師が
經声なひしし一城くさる言山よ未久洋くさる江河
よらちあふぐまに柳門と肩ぬきしと仙居の朝とあ
ぐ年志くく止むけ獅子吼とくく少天耳趣は
維摩はく水く武陵蕉門の御林千白兔園二代のあ
る一源宗瑞居士之居士愕然とくくさるく少天耳

然物くく信文しやあつて二ふよ若くく信文
知くは中是のくく麻衣山は即興の合意口号は解
顔く神慶不思後事ふ信持奇ある我女なる人
と一梅三葉くくさるくく一山千谷千印き傳へ
く研よあく海の鸚鵡あつてくく柳あ人小
法音の信後あまの能人ふ公屋の忠かあつて師は
印可くくその名は文人善哉くく古今獨歩此雅
思測もくくあつて肩と比はる者あつてやま
くく稱くくあつての成業くくあつて

の如く形は... 賛美の一系... 麻衣山... 湯...
ま... 朝野... 将万代の...
院... 納... 麻衣山の...
師... 十...
... 何再...
... 禪鞠... 殿...
... 麻衣山... 既...
... 門...
茶毗の... 岩... 切...

... 四方... 柳... 煙... 火滅...
... 今... 送... 松... 土... 集... 石...
... 通... 推... 殿... 移... 早... 奴... 骨... 計...
... 朽... 押... 奴... 海... 内... 仰... 止... 風...
... 靡... 影... 暮... の... 一... 系... 碑... 文... 研... 揚...
... 心... 一...

... 心... 一...

心継房風并示鈔記

茂蘭從上人廟碑

師諱從字園雅號本種東都人也父
 某嘗有五子僉矢憂悲不可說焉因
 母身師之日自詣延山禱高祖大
 士曰妾拙從來不能育子仰願大悲
 力俾兒有福則奉歸釋氏也師在胎
 凡十有二月正德三龍集癸巳誕乎
 東都師生而魁梧骨氣果秀穎父母
 悅無疆夏效孟家三遷共捨業移居

於谷中瑞輪寺側俾之深佛門律儀
年始七歲廼投紫雲啓師需剃度啓
師不自爲弟子遙告之其師勅賜
滿願大僧都園閣梨以列室灑未於
此乎僧都名師曰從字師曰園雅跋
涉千里不能往事西都依之終始從
法兄禪慧啓而長焉幼入乎總之雲
山學台教二十霜聲名籍甚階中座
漱玉泉時道樹幹空也爲心地塔善

長世稱四傑師與之友善夏有五
鳳之彌延享中有故爲小湊永上人
資嗣領北總岩部妙法山大乘圓音
徧響音日東於茲乎他門緇白合凡頻
請三諦說因講法華涅槃數年遐邇
沾法雨玄素繫珠夏善舞出長袖傍
極俳諧文藻壓東花師少遊武川越
肇謁中川宗瑞先生一見稱之以楚
材名曰滋蘭卓錫緇山後夏茂蘭夫

師之才之微瑞世不單祖山者何恙
世路崎嶇幽昧畏途巉崑不啻蜀滋
云蘭云此之稱諱識邪非邪而三歲
孩兒聞蘭師則知海內俳宗溲未富
樓那則亦何怨况北總俳士者咸毋
匪師之兒孫也九畹百畝是誰芳今
茲安永第八巳亥之夏受請於二千
里外抱病發駕邈乎山河艱辛不可
言也遂達乎奧松前法華寺轉妙法

輪凡旬日以報祖恩金鱗出東海
甘露及北狄雷音曰一震實相結萬
劫能事業畢秋八月歸東都烏虜悲
哉舊病遂不治同九月八日化于北
總世壽六十有七門人陀那一若犢
失乳廼葬麻衣山建塔標焉

銘曰

神者不測
矧乎斯塔
母方弗之
舍利在茲

新くしき常法身の佛の如

前鷹峯化主 梅丸日藻祇識

輓歌 句列任到来 之前后

月夜のそらみまに衣の如

襟垢のつゝ松も悲し葉は揺 境 如蘭

入月より木をさすつゝも庭は静 神崎 研石

あゝ一舟や只秋風の音こゝり 伊能 此柱

善虫の啼きもや協れあふれば 白作 葵道

うゝ影しゝ田毎や好哉一夜 伊能 投

蓮の葉も花もあつても程のち 川尻 志

世に秋成送る一葉の舟の種 大和田 和素

くさあすの舟也 高岡 鳥門

河の舟も 名木 五明

吾樂し 川舎

高も八きくまへー送解

あゝあゝ 馬鬣

種への種也 木浦 令水

送る火れ 舟房

折し 如胤

照る 榎水

蔓物 源田 五常

照る 古廓

難 大和田 東市

運 文哉

舟 古山 一葉

折 植房 如甲

蓮の葉は珠の露をくばれ上、
浦人
月は少の志をくばれ西の、
如雪

常州麻生連

九日の歳久よ置けしも處り
女
舜車

桐の葉はさくも先しつる
舟波

名もれ火を消へし葉の葉は
玉芝

切の厭ふ物もや無難塔
滄浪

上品は葉の葉くや煙た煙
吳竟



蓮の葉やあはれ世も蓮の上
寺作
変雅

葉はあや一炬はかたし哉
山下臺
免乙

場のお七尺を物もあはれ
白作
素考

又層小月の影もさ夜も哉
山の臺
秋呼

か秋の葉はさくはけ哉
堀筆
序水

若もくも伊やまき久の葉
知友

手もくもくもやあはれ
梅玉

三 松茂高月 謬月十六夜

南鋪 都卵

今宵は 此を月の幸やるの上

伊能 一原

看經の略年 衣試しる自裁、可卜

衣の身もさうなき 祈りふ、何白

月中も 此糸死ふつえと ぬききり 中葉

あつきの 祈りも 一協のあ 川之

新雪の 麻を ぬききり ぬききり

先師 誠信す

合掌の眼印 帯も雲地月 岩部 蕙花

師の衣 一くぬき 祈り

より 又又す 祈りの 祈り

鏡柯も 朽れさう 祈りや 茶垢 宗雅

月影を 庵所より かけし 虫の夢 棠花

陰縁に 祐日も ありし 祈りゆき ぬ 藤白井 宇洪

不測上人の 祈り 祈り 祈り
棠花 棠花 棠花 棠花
祈り 祈り 祈り 祈り
棠花 棠花 棠花 棠花

歎ききし人の恨も若き時 舟山 西湖

ついでに十か此相を塚に 釋 梅居

葬や羽と毒も毒 一 東白

紫く 一 何龍

教 一 滋蘭

若ふ今 一 孤杆 三倉

山寺 一 一舫

と 一 亀淵

川 一 花友

仰 一 湖南

塚 一 山魚 多古

甚 一 女 あや先

師 一 朋摩

由 一 家丈

地獄 一 洞水 中村

一 一 横

柔の目廿東とあつりまゝかゝる、
一廻りあつり砕ぬ柔はらふ、
眼小房のしるし、
仲のうし、
本塚よ汝もあつりあつり、
思ふ月やまゝに事聞はれり、
やうくに並ぶる人まやしの恩、
八月より及そ思惟のなごころ、

樂只

梅堂

青苔

柳志

知川

如水

安之

高野

此風や極楽より月の中、
心をやいふ心も消ゆ、
一匹りり、
陰くま、
半のまふ此、
心を祈り、
柔此、
虫の音、

朴子

梅明

山崎 活明

免耳

祇拍

鬼火

井植谷 羽觴

方田 友雅

散る流しに花よりさるる葉の相 卧石

東宮井より 先師為宗の

訃告あり
にと後まきし

き水と一に海なり 水枯れつる 泉州境 蘭菴

み海

予方思ふ所清人よりし所は予は是れ水あり
先師は終化その物に送る所の歌を帰陽
此日羽州大曲より村子宿より一いぬ月

十四のれをや 世々無常なるまよと人々を
を起すふ心年 疏ふはこころを思ふまする
此を六人馬と名やし 六相小罪ありし
いふ所のいふ宿は是と先かそのゆゑに
盆會つゝ先山とやして蓮の花をよの
物来さるるをさるる此志成十方にあり
つと先朝より宿の傳伽梨ありしを物依
すもなふ又自若しのそ子宿ふるも世の記法

宗電方へ送つてよの作よ千里試を
其後よ下よよよよ手皆焼香
積れよよの量もんくつ名中
あよよよ思案つらむ

宗電

梅丸様

祭文

謹く海見考妣ふり我も一和又何國の
土を冒致理西よよとよとよと
七十ふ年一而往罷四百餘年の旅
將加る言直れ煩り日ぶよよはは
飯粒や着致絶よと七十餘日只
りよ咽泣一才罷つては使さる
草敷のぶとく起れよよの

似せしとちりくを念を定へ二定成
洋を以て頭先う地よ申りやとまを諺に
いふ物怪て上法とやせしと終と始と百
味とくらあり五果のまけ之開き誦す
るよきうまうぬき八只の路に終を思
とあするのま蓋——寸雪二天攻を厚い少
地百年の園を除く事物のみらあり
すうかくれと——況や一巻は界に即

一巻の如く

塊極もふざり
扇もやふ然し

女氷亥の——能

於羽州秋田の旅館

後原敬白

去る葉や侍跡るかき由此致 玉造 可雲

新注の明くもきえんと而箇日 助沢 梅鏡

蘭のゆく是は歎くや虫の音 福田 菊人

蓮葉のくゆれ其まや扇屋 馬桑里 鸞兮

注の月影あや葉のまふ腕 仁良 桃仙

侍れ色あそくや海はま 馬桑里 梅東

谷は又あつくも葉はま 伊地山 芝丸

ふ雲の帰ハま 九蓮 鳥光

新注くも音も音も 研揚 雷斧

うく枯く 千丈

あく 蒼梧

根小く 万歳 鷺泊

此 岡飯田 棋羽卒

以 東臺 耳洲

亦 中佐野 完笑

不 大原 白牛

杜

あ

侍るまゝく千の柳の柳安久山一后

さゆきさぐり悲しき麻の研推谷

そえ揚り結んのはらう哉、兎眠

りあしは虫もさかす揚のあ、千枝

あつきもさかす魚は手合、徒猿

けきや問ふ人もあきけのあ、玉思

ゆくえのみちもゆきし後飯塚桃水

あうこれけねをそとすのあ寺吹人琴才

あつきまのあつきまのあ大堂如睦

あつきまのあつきまのあ勝研

あつきまのあつきまのあ和水

あつきまのあつきまのあ高谷白沙

あつきまのあつきまのあ山中左文

あつきまのあつきまのあ白道

あつきまのあつきまのあ李月

あつきまのあつきまのあ米倉如松

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
堺 錦江

為この間もくちや 二のくちや 萩のくちや
小池 金城

くちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
小原子 花遊

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
高田 里倉

あつたなまのくちや 萩のくちや 萩のくちや
船越 吟鳥

くちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
如林

あまのくち

くちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
松山 千之

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
如猿

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
茂之

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
椿 未之

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
亀崎 龍肖

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
久保田 靨星

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
小見川 素水

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
大浦 素桐

萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや 萩のくちや
毎本 振海

栖るわが樹をく推る月小窓
八日市場 總旗

秋をて侍悲——きうん
久方 珊巴

入月の影をさうりやわが面
堀之内 観水

あ——の音も秋をあり協の音
寺内 素川

白よりく小窓の——葉の羽をさう
森戸 雨考

悲——さの秋は骨を麻はさう
稻荷山 水

名のをた抜く——き場一ツ、
起友

同海と秋——悲——葉はさう、
指月

六の御門をわすれし

熟りまきし秋をんゆく煙をる
左原 千峨

葉も葉もさうり秋をんゆく煙をる
佳淑

アウチ

植うえしせむし手向をる葉の音
上川津 李庭

秋をんゆくし秋をんゆく煙をる
壽仙

思ふをんゆくし秋をんゆく煙をる
鍾子

琴下城破るるひこく煙のそふ 雪膏

公川の秋城記多やまの秋 南竹

寺坊うま一層の霞や其うの上 玉斧

侍のあやみ結んた九日了如 岷江

そある路も中のおふ葉の匂如 竜和

妙法の火やうあもくそ都山 巴参

師恩のつれれこもい山海

而も能くこの痛すくあらう
何れはあつらうこあや

まのの物風りや原も中

はまのの初こもはゆとけき
あある一葉城なる半こあはぬ

置る城手向すしを墓は市 大坂 杉吹雪

風雅りこ心城記をいし

ふよあふあうりし
け道はつさあき

濃不破白桃下

あましん如人ま今月の友 又令

新とく如野為事も掬のす向哉 未蝶

去る派あきと秋もきくや志初ま候 歌舟

言の字れきまひけや是も鳥の跡

亀六

東都天地菴社中

情あくし夢のきけりる瓢く如

我泉

おきやうてきあしおきてきまも我

徳布

あつきの新法しついでしや

茂楓

蘭ちるや此世は油と名の葉

眉雲

西へ入る暮やあまの八日月

桂洲

幾海松の海の旅するまきり雨乃

口泥れさしりて水あつて松を家

写の紙ひらふむごう今月のたし

地多しあつてきえきしもがきあつて

しる言語もあつてきえきしもがきあつて

あつてきえきしもがきあつて

心地あつてきえきしもがきあつて

破りしつてあつてきえきしもがきあつて

いづれもよしくたのしみは

九月九日左京の舟中にて遷神

秋の夕暮

思ふよりよければ世の縁も後の月

小まよもゆきとまよき温縁係

第一園社中

眼も涙も机のくくや形もま

意の實は入日秋長くもあふ

馬と今秋昔く啼くは別

よやせと教へも葉はあふ

折打小篋の跡は園の那

淋さの跡もあふるも秋と

唯そよ淋さ秋を柳の那

葉酒とつるささし組の鳥

自向する秋も馬のあふ

教りたえりしれぬ葉の匂ひ

霜

霜

梅年

新々

竹英

蒼谷

鳥林

湖月

信之

鳳羽

原長

梅三

固雄

錦江

なみりも葉のわたりや葉のよ

梅秀

かに流や葉のまきあて葉のと彩

春艸

霞のともりも秋のわかれ

和月

燒香のまじりも葉や秋の風

松人

なまじりも花のひも葉や葉の香の

蜘蛛洞

彼国へと葉の流も日向の

五町

名香をあの世へまはすと夜も

歸方

ふれもこころと秋やまきの

角子

力なりも葉の流も葉の香

百川

二のめは月出油もつるま

長民

春のよも葉のまきあて

梅房

白兎園社中

まの園のあまも葉のよ

萱堂

八月や花のひも葉の流

李門

今も只候も葉のまきあて

兎什

春のよの流も葉のよ

十

佛の持の梅あつとあつたさし 宗子

又合此別をさす夜はとやあや 不門

あしけさるる或日

石とあるもつとまて樟のつらあつ

と藤一あひ一云のあふれ

ねさつあつとつと

中級の世と示すと大悟の名あ教 宗字

又合此あつとあつとあつとあつと 一雙

茂葉雙いあつとつとつとつと

導あつと法のあつとつとつと

宗字あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

蓮の字もあつとあつとあつとあつと 吐月

上人の字の法あつと

佛のあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと 魚文

宗字あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

接岸のちうもなき 夜義 梅人

菊月の八日ありき

そらふや 菊子 菊子 菊子 野逸

仇之味の 徳をたてて

菊子 菊子 菊子 菊子 榊門

菊 一日中をそらふく 折紙を 楚若

白 菊子 菊子 菊子 菊子 栢翁

八月 菊子 菊子 菊子 菊子 宗瑞

尾文や三十母かの九人き

正らーといしり舞

菊子の菊子 菊子 菊子

菊の手をたて 菊子 菊子 菊子 秋 秋 蓼太

色 菊子 菊子 菊子 菊子 素丸

祭文

初七日忌

謹言先師 海蘭日従上人は昔よりも千佛自持
 むし 殿初に泊し年々をいふ年とや殿の雲尼を
 西より月雪衣衣のうけたりはきつ川と
 師の指揮と業のりし 実を教化慈母
 此を兒と保んするいし 九世の清水を
 流る中 福より或日病歿す 子々自記より 孝死
 ころも 信よ不難ふに 我佛教汝等より 當り佛
 の二十四字戒句より 冠し 欠經方一巻を供養せし

其元より 持守ひきたる 遺命の旨 戒をくふ
 抑他經をすけ 戒律の自性 冥會せりと ねむいせと
 好む心も ちや 定ま 今日初七の忌と ぬく 牌あり
 御集あとし くの 明月の遺照 下を 幸ふ 是を 知
 とし 服冠は 得さく やと 席上の 法を 懸け 合
 し あり 首尾と する 心を 別百味の 縁通し かけ
 け 一篇を 祈り 水や 刺と 伐り けり 戒まき せし ぎや
 心抄子 定規ふ 災と 只よ 一言万高の 法命を 傳
 心と 社中の 由り 伊と 臨風會 奉成に ころ 内

いもよよと條を祢うくも
後者を納めし一也

二十
先師の靈玉 弟子 木

我意を只きも那くきあれ月

浅蘭

深山のてり形を居あう思を

来儀

あしを背り及浦の粟あまを

風葉

い。海汝一まきけ悲又あう一我

梅丸

等。一は涙を愛の一子多

宇洪

ふ。孫一くくたも後もとぬ

梅居

取。て前も去りて神子も神

既醉

軽。く川もももやう一月

洞水

情。さ小云々解の由を建たる

沾明

不。りしとは和ときく一也

完耳

心。さ遠き事子も水もあふ

一志

者。能くしり幸すしゆ家

蕙花

二

七

二
何。成。朝。と。日。直。の。瘡。よ。去。と。け。て
滋。蘭

汝。存。朕。夢。よ。砂。糖。ぬ。ま。り。し。ふ
如。蘭

等。歌。の。端。一。ま。さ。げ。る。連。弄。式
研。石

之。相。公。お。り。思。河。と。此。凍
葵。道

何。忘。る。粉。ふ。養。す。も。み。ま。さ。の
梅。堂

善。提。よ。後。世。と。保。れ。此。結。梅
樂。只

待。滋。く。は。路。中。高。り。高。士。の。月
此。柱

何。程。も。量。程。も。未。布。子。の。秋
一。投

一
尚。殆。ふ。ぬ。う。り。自。潤。の。半。毛。の。似
鸞。兮

い。く。程。ひ。け。腐。り。く。し
唐。鳥。光

何。磨。や。未。八。十。程。好。く。ふ。り。て
西。湖

佛。波。錢。玉。の。名。子。種。糸
琴。文

一會焼香而去

八月の光や星もひかり
来儀

追か

上総上決賀

九二拾 原本の桂斯の如く
終の字あり

糸の音にも向くや糸の二も云 竹丈

ふま字一糸も潤乃も向く如 一以

吹越一十境へも向く高み如 角之

多る強々やあハタメのも向く如 蓮暁

短冊乃木の夏ふと交て秋の風 几雪

もや成る糸の風もをり如 秋の蝶 白鳥

にもひあやも糸のあやも やまのふ 青牛

もろかこ成風の便や糸のあや 注夕

